The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉『裏紫』論 : 逡巡する姿の形象化をめぐって
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	阪大近代文学研究. 2010, 8, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

樋口一葉『裏紫』論
――逡巡する姿の形象化をめぐって――

水野 亜紀子

一　問題の所在

『裏紫』は明治二十九年二月、『新文壇』第二巻第二号に（上）の章のみ掲載された未完の作品である。筑摩書房版『樋口一葉全集』において未定稿Ⅰから㈧として収められている資料には「（中）」という記述が見られることから、（上）の章の脱稿後、続きが試みられたことがわかる。しかし（上）の章より後は試作の段階に留まり、（中）の章も（下）の章も成らず、本作は未完のままに終わった。

この作品が完成に至らなかった経緯には、体調不良や忙しさなど、一葉にとって執筆の妨げとなる事情が関係していると考えられる。明治二十八年の末、一葉は『やみ夜』を『文芸倶楽部』臨時増刊閨秀小説第十二編に再掲するため原稿の字句訂正をし、また『この子』や『わかれ道』、『たけくらべ』の十五章、十六章の執筆にも取り組んでいた。そうした事情が少なからず『裏紫』の中絶に影響を与えていたといえるだろう(1)。先行研究には作品が未完のままとなった理由をこうした外的な要因にのみ求めるのではなく、作品の内部に探ろうとする試みもある(2)。

本作は中絶していることもあり、先行論は決して多いとはいえないが、それらを概観すると〈姦通〉を題材として選び取る点が評価されているといえる(3)。本作が〈姦通〉のモチーフに支えられていることは確かであろう。ただ、従来の論では細かな点にまでは目が配られておらず、作品の手法が明らかにされていないうらみがある。そこで、本論では特に語りの特徴に注意を払い、それが作品全体にどのような効果をもたらしているか考察したい。これまで語りに着目して一編が論じられることはなかったが、語り手の語り方には意図的なものがうかがえる。そして、それは決して見過ごすことのできない役割を果たしているといえる。この考察では〈姦通〉といった題材に着目するだけでは見えにくい部分を浮き彫りにすることで、（上）の章に示される作品世界をより明

らかにする。

二　お律の事情に通暁する語り手

『裏紫』は夕暮れの店先に「女文字の書状一通」が届くところから始まる。まずは冒頭、その手紙をめぐってお律夫婦がやりとりをする場面を中心に、語りの特徴を捉えていきたい。語り手はお律の振舞いに関して、「態との高笑ひをして聞かせれば」「飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず」と言葉を添える。また、「知らぬ事なれば仏性の旦那どの急き立るに」とも述べる。それらはお律の態度が演技であることや、お律には夫に知らせていない隠し事があることを伝える。語り手はお律の事情を知悉しているかのように、まだ具体的に示されない事柄をところどころでほのめかすのである。後に「何処の姉様からお手紙が来ようぞ、真赤な嘘を」と、お律自身の言葉によって彼女の偽りが明かされるまでの間に、何箇所にもわたって語り手の先走った言葉が差し挟まれている。

さらに、語り手が暗に伝えるのは、お律が隠し事をしているという事実そのものだけではない。それに関わるお律の胸中をも伝えている。次の箇所に着目したい。

不実な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知れはせぬぞと知らぬ事なれば仏性の旦那どの急き立るに、心の鬼や自づと面ぼてりして、胸には動悸の波たかゝり。

語り手は傍からうかがうようにしてお律の様子を語るが、その際に「心の鬼」という語を用いる。山田有策氏はこれを、直前にある「仏性の旦那どの」の「仏」に対するもので、「主人公お律の胸中の想い（吉岡への恋情）の象徴」とする(4)。しかし、その説明ではお律の胸中をめぐって明らかにされない点が残るといえるだろう。

「心の鬼」は十世紀後半に初めて現れる語である(5)。早くは『蜻蛉日記』『一条摂政御集』に見ることができる。和歌や物語に用いられ、鎌倉以降にはあまり使用されなくなる。この語があらわす意味は文脈から推して「疑心暗鬼」「良心の呵責」「気が咎める」などの現代語に相当するように見えることから、研究のうえでもそのように解釈されてきた。「心の鬼」の表現の生成や、語義が変化した背景について考察する田中貴子氏の論考(6)では、「心の鬼」の原義は「邪心の存在を認識」してそれを鬼として形象化する精神作用のことであるとされる。田中氏は次第にこの語の示すものが「心の中に棲む他者と化していく」ことを指摘し、後には原義の範囲におさまりきらない派生的な意味として「心の中にあって邪心を咎めるもの」という意味が生じたと述べる。また、森正人氏は田中氏の論考に反駁を加えながら「平安時代に、鬼とは隠れ籠もるもの、姿を見せないもの、目に見えないものと

考えられていたことが知られる。これを鬼の本性と見なすならば、「心の鬼」とは心のなかの見えない部分、深く内におさめて隠す心、知られたくない心の奥底という意」であり、鎌倉以降は「心の鬼」が「心中ひそかに恐れる意に転義してゆく」と論じる(7)。

一葉は「心の鬼」の語を和歌や物語から見出し、自作に用いることになったのだろう。語り手はお律に隠し事があることをほのめかしていくが、「心の鬼」を用いる箇所では隠し事に関わって、お律が隠しておきたいある心を抱くことをも匂わせている。お律が自ら邪な心を認識していることもまた、わかるだろう(8)。後にお律の様子に関して「大空を見上げてほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいとゞ暮深う成りぬ」と説明する箇所があり、お律がある思いを抱えていることがその箇所より後に明示されるが、それに先んじて、語り手はお律の心に関係した子細らしい表現を用いるのである。

「心の鬼」は時代がくだるにつれてあまり用いられなくなる語であるというが、『裏紫』と時期をほぼ同じくして発表された泉鏡花の『化銀杏』(『文芸倶楽部』第二巻第二編、明治二十九年二月)にもその語は用いられている(9)。

『化銀杏』にはお貞とその夫である時彦の不和が描かれる。そして、お貞と下宿人である芳之助との仲が不義と疑われるようなものとして描かれる。従来から、作中のお貞の述懐には愛のない結婚への抗議が読み取られているのであるが、そこには次のようにある(10)。

私はね、可いかい。其つもりで聞いておくれ。私はね、何時頃からといふ確なことは知らないけれど、いろんな事が重り〳〵してね、旦那が、旦那が、何うにかして。死んでくれりやいゝ。死んでくれりやいゝ。死ねばいゝ。死ねばいゝ。

とさう思ふやうになつたんだよ。(中略)

あゝ、人の妻の身で、何たる恐しい了簡だらうと、心の鬼に責められちやあ、片時も気がやすまらないで、始終胸がどき〳〵する。

其がといふと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、左様思ふから恐怖んだよ。(十三)

夫に対して「死ねばいい」という思いを抱くようになったお貞は良心の呵責に苦しむ。そのことが「心の鬼」の語を用いて述べられている。

また「心の鬼」は、清水紫琴の『心の鬼』(『文芸倶楽部』第三巻第二編、明治三十年一月)で、タイトルに用いられる。ただし内容を見ていくと、妻に対して過度な束縛を加える夫の異常ともいえるような心性が鬼に譬えられており、その用法は「心の鬼」の語が持つ意味からは、ずれているといえる。ただ、ごく近い時期に夫婦間の齟齬という似通った題材を扱う中で、「心の鬼」という語が共通して用いられることは注目に値するだろう。鏡花や紫琴が本作を意識したかどうかは

確かではないが、ここからは彼らが創作において関心や問題意識を共有していたことがうかがえるのではないだろうか。

三　夫の人柄を強調する語り手

前節では語り手が内情を知悉しているかのように先取りしながらお律の様子を語ることを指摘したが、その他の点で注意をひくのは、語り手が早い段階からお律の夫のことをお人好しであると断定していくことである。語り手は夫が一言も発しない前から、夫のことを「結構人の旦那どの」と述べ、彼の人物像をある一定のイメージへと誘導する。その後にも「仏性の旦那どの」「当世の算用知らぬ人よし男」などと述べている。語り手はそれらの言葉で夫の性格を善良であると明言し、さらには夫の振舞いの全てを、そうしたお人好しの性格からくるものとして説明していく。

それらの箇所からは、夫がお律に騙されていることを暗示する意図を読み取ることができよう。これは事情を知悉する語り手による、先取りの一つとして捉えることができる。しかし、初めから夫がお人好しであると述べるこの語りは、夫に関する他の理解を封殺しているようにも見える。

確かに夫は好人物である。お律が手紙の訳を話すと、すぐさまその言葉を信じて疑わない。「はて扨気の毒な」と「太い眉を寄せ」る表情も見せている。そして「不実な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知れはせぬぞ」と促す。お律の思う壺にはまっているのである。夫にはお律に対して優しく甘い面もあるだろう。遅い時刻に外出の許可を出すこと自体がそれをあらわしているが、加えて出掛けるお律に「車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいに」と声を掛けている。

ただ、語り手が夫を「仏性」「人よし」と断定していくところには、いささか強引さもうかがえるだろう。試みに、夫がどのような人物なのか本文の記述から読み取ってみたい。例えば、お律が演技で手紙の催促を重く受け止めていないような様子を見せると、夫は「お前の怠りを我の故に取られて恨まれても徳の行かぬ事」と述べる。お律やお律の姉に良い顔をしようとすることから、彼が評判を重んじることがわかる。そこからは八方美人であり、さらに見栄を張る性格であることがうかがえるだろう。姉の「心配」に対して心を砕くところには、人柄の善し悪しを別にして、それだけ日常に余裕があることもわかる。また、お律に車を呼ぼうかと声を掛けるところには、金銭面における大らかさが出ている。語り手の評価の言葉を取り払ってみると、夫について様々な受け止め方が可能になるだろう。さらに冒頭の記述を見よう。

夕暮の店先に郵便脚夫が投げ込んで行きし女文字の書状一通。炬燵の間の洋燈のかげに読んで、くるくると帯の間へ巻納むれば起居に心の配られて物案じなる事一ト通

ならず。自づと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、

「結構人」の夫がお律に声をかける場面である。これを『われから』(『文芸倶楽部』第二巻第六編、明治二十九年五月)の一節との比較で捉えてみる。

奥さま火のもとの用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寐よと仰しやつて、同じう寐間へは入給へど、何故となう安からぬ思ひのありて、言はねども面持の唯ならぬを、旦那さま半睡の目に御覧じて、何故寐ぬか、何を考へて居るぞと尋ね給ふに、

『われから』の恭助もまた、お律の夫のごとく、妻の様子を見て彼女が何も訴えない先から声を掛けている。そして話に耳を傾けている。

恭助の対応と、お律の夫の対応は、ほぼ同じである。しかし、『われから』のこの場面は、恭助とお町の会話によって、夫婦間の心のずれや行き違いを示していた。恭助は財産家の娘である妻と表面上うまくやっていければそれで良いと考える男である。後には彼が妾との間に子をなしており、妻を欺いていることも判明する。恭助は普段から妻の機嫌を取り、妻の小さな変化にも気を配るが、決して愚鈍ではなく、お人好しの人物ではない。

他の作品を参照すると、妻の顔色をうかがうという行為そのものからは夫の人柄を判断することができないことがわかるだろう。『われから』には与四郎が妻の顔色をうかがう場面も頻出する。与四郎の場合、顔色をうかがうのは、人の好さからというよりは恪気から出た行為であった。

『裏紫』では「結構人の旦那どの」という言葉が添えられることで、彼がお律を心配するところには底意がなく、妻を気遣う行為も人柄からくるもののように読める。しかし語り手は夫の振舞いに関して、他の捉え方もあるかもしれないところを、敢えて人の好さや優しさからの行為であると見なして語る。語り手が過剰に夫の人柄を強調するところには、注意を払う必要があろう。

では、語り手はなぜ夫に関する読みを誘導するのだろうか。やはりお人好しであるとあらかじめ伝えることで、夫がお律から騙されていることを匂わすためであろうか。そういえば、語り手が夫のお人好しであることを強調するとき、その言葉は馬鹿にするかのような調子を帯びている。「結構人」というが、これはお律が夫を騙していることを承知したうえでの評価である。また次の箇所を見よう。

旦那どの声をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉。何の商人の女房が店から車に乗出すは栄耀の沙汰で御座ります。其処らの角から能いほどに直切つて乗つて参りましよ。これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい声にて笑へば。世帯じみた事をと旦那どのが恐悦顔。

傍線部のように、お律が夫を欺きつつも愛嬌のある態度で接するとき、夫はそのことに気付かない。「恐悦顔」は、表向きしか見ずに満足する夫への揶揄に当たる。

ただ、そうだとしても夫の人品に繰り返し言及する必要はあるのだろうか。本作では読み手の関心をひくような語り方がなされるが、殊に夫の人品への言及には別の意図が込められている可能性がある。夫の「仏性」「人よし」の強調は、〈姦通〉へ向かうお律の意識の移り変わりを描く際の表現と密接に関わるのである。そこで、次節ではまず、お律の心の動きを何に着目してどのように把握すべきか論じる。それを踏まえて、お律の心の動きがどのように表現されているか考察していきたい。

四　お律の〈裏表〉

河村清一郎氏は〈姦通〉という本作の題材が決して珍しいものではないことを指摘したうえで、「この作品の主題は、主人公の、「立ち止まり」と「決断」という、二つの契機において成立っている」と述べる(11)。論者もまたお律の心の推移を描くところが本作の要であると考えるが、その捉え方についてさらに踏み込みたい。

お律の内言は三箇所にわたるが、三箇所目ではお律が嫁ぎ先の決まったときに、ある決心をしたことが明かされる。

最初あの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行ったのでは無い物を。形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、

思い通りにならない状況の中で、意中の人物ではない人に添わされることになったとき、自分の心を納得させるためにその決心はなされた。これがその日以降のお律を支えることになる。籔禎子氏は「吉岡がお律の結婚前からの思い人であったという設定が、今この時のお律の選択の意味をそこなっている感もある」「登場人物のそれぞれの現在が、これからより過去からの枷に取り込まれた所で動くことになって、物語自体の前向きな発展を阻むことにもなりそうである」(12)と論じるが、お律が抜き差しならない場面において「極めて置いた」ことがあるという事実は、それ自体が主題性を帯びているといえるだろう。お律は「裏道の働き」をすることになるが、その選択が意志を持ってなされたということが本作においては重要である。この夜の心の変転は、この前提をもって捉えるべきであろう。

「形は行つても心は決して遣るまい」と決めたお律であったが、煎じ詰めれば今日まで道義心から気が咎めていた。この夜、家を出た時点においても、それは変わらない。そのため、夫の「お前にすれば唯た一人の同胞。善悪ともに分けて聞ねば成らぬ役を笑ひ事にしては置かれまい。何事の相談か行つて様子を見たらば良からう」という言葉は思いがけず皮

肉となる。お律は「善悪ともに分けて聞ねば成らぬ役」どころか悪い行いのために外出しようとしているのである。悪行であると認めるからこそ、一人になると逡巡することになる。

お律の内面を記述した箇所で着目したいのは、お律が「人は知らじと自ら悔ませども」という状態から「人知らぬうちに汚れを濯いで仕舞つたなら」と考えを改めるが、その後には、夫に知られても構わない、さらにいえば世間に知られても構わないと思うようになることである。お律は「裏道の働き」を〈隠す〉ことでようやく己の決心を貫こうとしていた。そのためであろう、後ろめたい思いから決心を退けようとする瞬間を迎えている。鍵となるのは、お律がその後、「裏道の働き」を〈隠す〉という手段をとらず、自らそれを肯定しようとするところである。ここに、彼女の意識の転換を見出すことができる。

お律にとって「嫁入」のときの決心は自分を生かすための方策であった。本作は人間の備え持つ性質としての〈裏表〉ではなく、お律が意志の力で作り出した〈裏表〉を取り上げているのだといえる。

表現上の問題に絡めていえば、お律の〈裏表〉が語り手の語り方によって鮮明に打ち出されていることを指摘してよいだろう。前節において確認したように、語り手は夫を好人物であると断定しながら語る。そのため夫は人の好い人物として一面的に捉えられ、その人物像は深く掘り下げられない。作中にはお律の〈裏表〉には言葉を費やすが、他の人物の〈裏表〉には一切触れないという対照が用意される。そのようにしてお律の〈裏表〉が際立たせられているのだと考えられる。

五　揺れるお律と「優しき良人が心ざし」

ここからは、お律の心の推移がどのように表現されているのかを詳しく検討していく。お律は家を出た後、その家を振り返って立ち止まる。一つ目の内言では、主にお律の自責の念が示される。お律が自らを責めるのは道義心に苛まれるからであるが、まずは彼女の自責の言葉に着目してみたい。

何事も御存じなしに快いお顔をして暇を下さる勿体なさ。あの様な毒の無い、物うたがひと言ふては露ほどもお持ちならぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸にだましつけて心のまゝの不義放埒。これがまあ人の女房の処業であらうか。何と言ふ悪者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生の様な心であらう。此様ないたづらの畜生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかの様に可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる思し召。有難い嬉しい恐ろしい、余りの勿体なさに涙がこぼれる、彼のやうな良人を持つ身の何が不足で剣の刃渡りするやうな危ない斗画をするのやら。

引用からすぐにわかるように、お律は自分を責める際、夫を引き合いに出す。「何事も御存じなしに快いお顔をして暇を下さる勿体なさ」「あの様な毒の無い、物うたがひと言ふては露ほどもお持ちならぬ心のうつくしい人」「天にも地にも無いかの様に可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる思し召」と夫の自分に対する態度や人柄を思い、それと対比させるように自分の悪行を責める。お律は自分の行いを問うとき「心のまゝの不義放埒」に対して道徳的な観念を持ち出しているが、それだけには留まらないのである。それよりも「心のうつくしい」夫に対して済まないと思うことで自分を省みる。このように見ていくと、夫が善人であると断定していく語り手の語り方は、お律の内省を表現する箇所においても必要であることがわかるだろう。語り手は冒頭より夫のことをお人好しであると繰り返し述べることで、このお律の自責の表現に加担する。

ただ、次の点も合わせて確認しておかねばなるまい。お律は夫のことを全くの善人のように捉え、そのことで自分を責めるが、お律が自分以外の人間を善人として捉える目は姉にも向けられる。お律は「彼の人の好い仲町の姉さんまでを引合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまあ何処へ向く」と述べるのである。姉が本当のところどのような人物なのかは作中では明らかにされない。わずかに姉に関する話が出るのは、お律が届いた手紙を姉から来たものだと取り繕うところである。お律は姉のことを「気の狭い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人の性分、困りもので御座ります」と述べる。しかしこの理解に客観性は与えられない。夫もまた「女は気の狭いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるで有らうを」というが、これはお律に同調して述べられたものである。「女は」と一般化した言い回しになっており、姉の性質をいい当てたものではない。こうして見ていくと、姉が「人の好い」人物であるかどうかは不確かなのであるが、お律は夫だけではなく姉をも引き合いに出して自分の行いを咎めるのである。

一つ目の内言では観念的な言葉の羅列によってではなく、夫や姉に対する心苦しさを述べさせることによって、お律の良心が表現されているといえるだろう。お律が自分の行いそのものを悪いと感じていることはもちろん示されるが、彼女の気の咎めは主に、夫や姉の人柄との兼ね合いで表現される。

さらに、作品の後半では、お律の心の揺れが〈夫の優しさ〉を振り切れるかどうかという一点に集約されて描かれることがわかる。そのとき、お律が路傍に立ちすくむところには「優しき良人が心ざし生憎纏はる心起して」とあり、家に引き返そうとするところには「生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる考へ又もやふつと吹破られて」とあることから、「生憎」の語が付される状況がそれぞれお律にとって区切りとなっている。一葉の他の作品にこのような「生憎」の用法は見られな

いが、本作では本人の意図しないところで内面の変化に関わるようなきっかけが生じるときにこの語が用いられている。

先述の通り、お律を表向きの生活へと引き寄せる要素は〈夫の優しさ〉に集約して表現されるが、これに関わり次の点も指摘できよう。お律は表向きにうまくやっているが、その生活への未練は一言も述べられない。そのため表向きの生活に対する執着が全く見られないのである。例えば、作中には家を振り返る場面が二度ある。「何処の姉様からお手紙が来ようぞ、真赤な嘘をと我家の見返られて」と「横町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはら〳〵とこぼれぬ」の箇所である。この行為は一見したところ、生活など含めて家が象徴するもの全てを振り返ることの暗喩のようである。つまりお律が商人の妻としての現在に心を残していることのあらわれのように見えるのである。しかし、その後を見ると、「優しき良人が心ざし生憎纏はる心起して」とあることから、家を振り返る行為さえも〈夫の優しさ〉のために逡巡する様子をあらわしたものであることがわかる。

ところで、お律の商人の妻としての表向きの顔は、作中に丁寧に描かれている。語り手はお律を「奥も表も平手に揉んで、美くしい眦に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客様への世辞も出るお怜悧なお内儀さまと見るほどの人褒め物」と説明する。そこではお律に愛嬌があることや、如才なく店の切り盛りをすることが伝えられるが、それらの様子は全てこの説明がなされる前に提示されているのである。以下は、お律が出掛ける場面の引用である。

では行つて来まするとと店口に駒下駄直させながら、太吉、太吉と小僧の背を人さし指の先に突いて、お舟こぐ真似に精の出て店の品をばちよろまかされぬ様にしてお呉れ。私の帰りが遅いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るなら無限も床の中へ入れて置いては成らないぞえ。さんは台処の火のもとを心づけて、旦那の御枕もとへは例の通り御湯わかしにお烟草盆、忘れぬやうにして御不自由させますな成るたけ早くは帰らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、

このようにお律は小僧とおさんに指示を出す。商人の妻として店番の心配をし、さらに主婦として家内を取り仕切るのである。ここにはお律の普段の様子に近いものが出ているといえるだろう。また、次の箇所を見よう。

旦那どの声をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉。何の商人の女房が店から車に乗出すは栄耀の沙汰で御座ります。其処らの角から能いほどに直切つて乗つて参りましよ。これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい声にて笑へば。世帯じみた事をと旦那どのが恐悦顔。

夫への愛嬌、商人の妻としての自覚がここに示される。

お律は「お怜悧なお内儀さま」と「人褒め物」であるとい

うが、お律の如才なさは彼女の科白にもあらわされる。手紙を受け取るとすぐにでも外へ出掛けたいお律は、夫から許可を貰う必要があった。そのとき姉が次のようなことを書いてきたと述べる。

八かましやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせて呉れぬ五月蠅さ。夜分なりと帰りは此方から送らせうほどにお良人に願ふて鳥渡来て呉れられまいか。待つて居る。と言ふ文面で御座ります。

姉が姉の夫を「八かましやの良人」と書いてきたということによって、お律は夫が外出の許可を出すように仕向けている。

お律に関して語り手の叙述のみで伝えられる事柄は、外見の美しさくらいであろう。「美くしい瞻に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客様への世辞も出る」とある。総じてお律の人柄に関わること、特に彼女の表向きの顔に関しては、語り手の主観が挟まれない箇所でも伝えられている。ここからお律が商人の妻としても家庭の主婦としてもうまく立ち回っていることがわかるだろう。

ここまで見てきたように、お律の表向きの顔は作中に具体的に描かれている。しかし、お律の内言には結婚生活への執着の言葉が皆無である。それは不自然なほどである。確かに「彼のやうな良人を持つ身の何が不足で剣の刃渡りするやうな危ない斗画をするのやら」と夫に申し訳ない気持を起こしてはいるが、結婚生活の中で手に入れてきたものには言及しない。こうしたところにも、お律に「裏道の働き」を尻込みさせる要素が、表現のうえで〈夫の優しさ〉に絞られていることを確認することができる。

〈夫の優しさ〉に揺らぐ結果、お律は以下のように考える。

「お互ひに清いお交際をして人知らぬうちに汚れを濯いで仕舞つたなら、今から後の彼の方の為、私の為」「生中こがれて附纏ふたとて、晴れて添はれる中ではなし」「可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何とせう。私は兎も角彼の方は是れからの御出世前一生を暗黒にさせまして夫れで私は満足に思はれやふか」。このときお律は自分を納得させるための理由をいくつか持ち出している。自分にとって都合の良い理由で〈合理化〉するのである。しかし、これは決心を断念するための決め手にはならない。ここから突然「生憎」の夜風による意識の転換点が設けられる。それ以降、お律は自分の行いやその行いを支える覚悟を夫に知られてもよいと思い直そうとする。

ゑゝ私は其やうな心弱い事に引かれて成らうか。最初あの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無い物を。形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり。悪人でも、いたづらでも構ひは無い。お気に入らずばお捨てなされ。捨てられゝば結句本望。彼のやうな愚物様を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも

持つたのであらう。私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい。良人を持たうと奥様お出来なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れようと、私の良人は吉岡さんの外には無い物を、最う何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出せば、

お律は〈夫の優しさ〉によって生じた迷いを「今更に成つて何の義理はり」と位置付ける。〈夫の優しさ〉に「勿体なさ」を感じ、そのことから一度は立ちすくんだお律だったが、結果的には夫を「愚物様」と述べ、「誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れようと、私の良人は吉岡さんの外には無い物を」と述べる。この箇所では〈夫の優しさ〉を振り切ろうとする言葉によって、当初の決意を貫こうとするお律の姿が示される。「頭巾の上から耳を押」えることでからくも前へ進み出すが、最後には「冷やかなる笑み」を浮かべる。お律が己の決心を肯定していく過程はそのようにして描かれている。

六　逡巡を描くということ

本論では『裏紫』の本文を、印象で論じるのではなく細部に目を配りながら、特に語り手の語り方に着目して論じた。

まず、語り手が夫の人の好さを強調するところには、お律の〈裏表〉の問題が関わることを指摘した。他の人物の〈裏表〉に関する詮索が一切排除されることで、お律の〈裏表〉の特殊性が浮かび上がる。これにより、「裏道の働き」が出来心からではなく、意志を持って行われていることが作中に浮き彫りにされることがわかった。

さらに次の点を指摘した。お律はこの夜、かつての決心を肯定していこうとするが、その経過は〈夫の優しさ〉をお律がどのように受け止めるか、その変化を示すことで表現されるという点である。お律の心の揺れは〈夫の優しさ〉の受け止め方の変化という一点に絞ってあらわされる。そのような様式が貫かれることで、本作にはお律が迷いを振り捨てていく過程が明示された。

本作は結婚当初の決意を、道徳に反する形であっても貫いていこうとするお律を描く。〈姦通〉という題材は同時代において決して新しいものではないが、逡巡の中で気持を固めていく経過を描いたところは、やはり評価されるべきではないだろうか。単純化された表現となっていることは否めないが、本作は割り切れない状況の中で苦しみながらも、どうにか自分を生かしていこうとする人間の姿を描出する作品であるといえる。

注

（1）（上）の章の続きを寄稿するように雑誌の編集者から手紙で催促されるのに対して、一葉は断りの返事を出している。そのあたりの事情は橋本威「一葉『裏紫（上）』ノート」（『梅花女子大学開学二十周年記念論文集（国語・国文学）』一九八五・三）に詳しい。

（2）例えば、河村清一郎氏は「一葉における抒情の構造――「うらむらさき」をめぐって――」（『明治大学教養論集』一九六六・一）において「「上」における完結性がつよいだけに、後の場面をつけることがむずかしかったのだとみることが出来る」と論じる。藤井淑禎氏は「『うらむらさき』」（『国文学　解釈と鑑賞』一九八六・三）において「すべての責任を女性側に引き受けさせながら姦通への道を走らせることがはたしてどこまで可能であったかという問題」がからむと述べる。長谷川啓氏は「近代の夜明けに、恋によるあのような自我の覚醒をむかえたお律の行末にどう決着をつけるか」という課題に挫折したと見る。（長谷川啓「恋の狂気が意味するもの――『裏紫』を読む」『樋口一葉を読みなおす』學藝書林、一九九四、二四七頁）

（3）塩田良平「一葉の一生とその意義」（『樋口一葉研究　増補改訂版』中央公論社、一九六八）、松坂俊夫「『うらむらさき』小論（下）――その未定稿と中絶の意味――」（『解釈』一九七〇・十一）、籔禎子「『うらむらさき』――作品鑑賞――」（『透谷・藤村・一葉』明治書院、一九九一）初出は『女性文学』（桜楓社、一九八七）、長谷川啓（前掲書）など。

（4）山田有策「『裏紫』脚注」（『全集樋口一葉2　小説編二　復刻版』小学館、一九九六、二〇六頁）

（5）以下、「心の鬼」の一般的な理解については、森正人「心の鬼の本義」（『文学』二〇〇一・七）を参照してまとめた。

（6）田中貴子「「心の鬼」考」（『池坊短期大学紀要』一九九二・三）

（7）森正人　前掲論文・同「心の鬼の本義（承前）」（『文学』二〇〇一・九）

（8）「心の鬼」について、用例の検証とともに精神医学・臨床心理学の見地から論じることで「鬼」の生成と働きに迫るものに、長谷川雅雄　ペトロ・クネヒト　美濃部重克　辻本裕成「「鬼」と「虫」――「心の鬼」論に向けて――」（『アカデミア』二〇〇四・一）がある。

（9）『裏紫』の発表は明治二十九年二月五日、『化銀杏』の発表は明治二十九年二月十日。

（10）引用は『鏡花全集』巻二（岩波書店、一九七三）に拠る。

（11）河村清一郎、前掲論文。

（12）藪禎子、前掲書、二八〇頁。

【付記】一葉作品の引用は『樋口一葉全集』（筑摩書房、一九九四）に拠る。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。

（みずのあきこ／本学大学院博士後期課程）